The Japan Neurosurgical Society

中田瑞穂先生のご逝去をいたむ

中田瑞穂先生は，去る8月18日，82年の生涯を終えられた．50年住みなれた借家のふるい御自宅で，奥様の手厚い看護のもと最後のいきをひきとられた．暑い日であった．20数年来の持病の胆石症が亢じ肝障害および膵炎を併発したのが原因であったが，脳は22年前のWallenberg症候群発症に一致して，左椎骨動脈に限局性のアテローム硬化がみられた以外，動脈硬化はなく，あたかも壮年の脳を思わせるものであった．

早く涼風がおとずれるよう，それのみ願っていたが，耐え難い長い暑さの中で病臥2ヵ月足らずで到到亡くなられてしまった．

古語に「所謂師は鏡のごとしと，大鳴り小鳴りはその撞く人の力に由るまでなり」という．またとない撞鐘にめぐまれながら到々力一杯撞くことが出来なかったことを思い，とりかえしのつかぬことをしてしまったような気がして悔まれてならない．

先生はいち早く脳外科に興味をもたれ，大正13年から昭和2年にかけての外国留学の際，ヨーロッパに於ける脳外科も見学されたが，当時は単に一流の外科医が脳の手術を行い，脳外科はどうあるべきかという同寮と研究心と心構えに欠け，したがって脳腫瘍の手術に於ては予後不良で，到底信頼のおけるものではなかったという．そこで再度の外遊に於ては，その頃既にクッシングやダンディらが優れた成績を挙げていたアメリカ派の脳外科を会得すべく合衆国に向かわれた．昭和10年から11年にかけてである．クッシングの手術には手持ち電燈で手術野を照らす役割をかってでて熱心に見学されたという「ああいう地味な，長い手術を始めから終りまでみている人は他になかったからね」と笑って語られたが，いささか気むずかしやのクッシングも「肩に手をかけてよくみるように」といったそうである．帰国されてからは，わが国に於ても，このような真の脳外科が育たなければならぬことを益々痛感され，静かに，たゆみなく努力をつづけてこられた．脳腫瘍の手術の際には1例1例克明にスケッチされ，できるだけ多くのものを学びとろうとされたし，死亡した患者があると，北国の冷えきった病理解剖室の中で最後まで立ちつくしておられた．このようなことが「脳腫瘍」および「脳手術」の著書となり，わが国脳外科の育成に大きな力となった．

昭和23年日本外科学会を主宰されたとき，ひきつづき故斉藤真教授を会長として第1回日本脳神経外科研究会を新潟で開催され，これが日本脳神経外科学会のスタートとなった．

新潟大学では外科学講座が1つですべての外科を包容し，中田先生が主宰しておられたが，昭和26年12月に第二外科学講座として脳神経外科学を独立させ教授として移られた．更に脳神経外科は神経の中にあらねばならぬというお考えから脳研究所の構想をたてられ，これが停年御退官の翌年32年4月に脳外科研究施設として実現し，42年には大学付置の新潟大学脳研究所となり，7部門，1施設に発展し今日に到っている．

先生は己れにきびしく，約300篇におよぶ論文はすべて心をこめて書かれたもので，その中ではいささかも先人の業績をおろそかにされることはなかった．又他人を評価するにも厳正で，その点怖さの印象も与えられたこともあったと思う．22年前にWallenberg症候群をおこされたが，そのときの克明な自己体験記は，いかに学問に純粋に，そして熱心にたち向かっておられたかを如実に示すものである．

先生の患者に対する治療の態度は積極的であった．かってJefferson の "Human as an experimental animal" の言葉を引用して講演されたこともあったし，大脳半球摘除術を本邦でいち早く行われたのをみてもわかる．しかし常に心底患者を思う心からであった．先生に是非にと往診を頼まれても，大学の患者に責任があるからといって一切断られた．故勝沼名誉教授が，20数年も前になるが，新潟へ来られ

NII-Electronic Library Service

The Japan Neurosurgical Society

たあるとき「ここの脳外科で治療をうけた患者はみな心から感謝しているよ」といわれたことがある．

俳句もさることながら，晩年にはむしろ絵に御熱心であった．細かな写生で誠に生き生きとしていて見事なものであったが，手術の根気を養う為もあるといわれたことがある．画きはじめると何時間でも一気に画かれたようである．手術は繊細で正確で，いくら長時間でも静かに黙々とすすめてゆかれた．「刻々と手術はすすむ深雪かな」「学問の静かに雪の降るはすき」の句は先生そのものを現わしている．

先生は亡くなられる2ヵ月程前まで名誉教授室へ出てこられカレントを読み，文献をひき，思索し，書きものをしておられた．あるときなど「面白くてなかなか死ねないよ」と笑っておられた．バビンスキー反射，癲癇の史的考察，意識，記憶，心の問題，そして脳の可塑性など神経科学全般にわたる示唆に富む論文をかかれた．校正なども一言一句目を通され，最後に書かれた論文の校正が，お亡くなりになる数日前に来て，私に頼まれながら御自分でも床の中で一生懸命目を通しておられた，すっかりお痩せになり「わがままばかりでまわりに迷惑をかける」「どうして人は自分をかいかぶるのか」などいわれたとき，先生の期待に沿え得なかった私など何とも声が出なかった．

先生の根底をなしていたものは，真の心の温かさと純粋さ，そして謙虚さと責任感であったと思う．これが無論先生の学問の根底をなしていたし，患者に対する考え方でもあった．そして本当の医学とは何か，臨床医学とは何かを日常の中でそのまま示しておられた．人間としての先生にひかれて，先生の為なら何でもしよう，しなければ気がすまぬという多くの信者がいた．

先生はまたとない多くのものを残して去ってゆかれた．その一つ一つがこれからもながくわれわれの通標となってゆくであろう．

めぐりあわせとはいえ，私など神の恵みの何と深かったことか．

植　木　幸　明

NII-Electronic Library Service

The Japan Neurosurgical Society

故　中田瑞穂先生　略歴

明治26年４月24日島根県の津和野にご出生
大正６年　東京帝国大学医科大学卒業
　　東京帝国大学副手
大正８年　東京帝国大学助手
〃　11年　新潟医科大学助教授兼新潟医科大学附属医学専門部教授
　　新潟医科大学附属医院外科医長
〃　13年　外科学研究のため，オーストリア国，ドイツ国，アメリカ合衆国およびフランス国へ出張（昭和２年帰国）
昭和２年　新潟医科大学教授
〃　10年　脳神経外科学研究のためアメリカ合衆国およびヨーロッパへ出張（昭和11年帰国）
〃　23年　日本外科学会会長
　　第１回日本脳神経外科学会を発足
〃　26年　第７回日本脳神経外科研究会会長翌年より日本脳神経外科学会となる．
〃　27年　新潟大学医学部教授兼新潟医科大学教授
〃　31年　停年で退官
　　新潟大学名誉教授
〃　32年　新潟大学医学部附属脳外科研究施設長事務取扱
〃　33年　紫綬褒章
〃　42年　文化功労者
〃　43年　日本学士院会員

この間　日本脳神経外科学会名誉会長
　　日本外科学会名誉会長
　　日本神経学会名誉会員
　　であった．

昭和50年８月18日で逝去，享年82才．

NII-Electronic Library Service